市民句会報

令和二年十二月二十三日　オーテピア高知図書館（高知市民図書館）　○印　味元昭次選　順不同

○まあちゃんが教えてくれた冬の虹
着ぶくれて流星群と電飾と
石鹸のかたかた鳴って湯ざめけり

初江

○着ぶくれて融通きかぬ漢かな
遊ぶ子を母の呼ぶ声日短し
冬うららはやぶさカプセル帰還せり

美貴

○老人が屯して見る冬の虹
○着ぶくれて世に背くことなかりけり
冬木立ホテルに聖書置いてあり

弘

奥土佐の平家の里や冬銀河
京の旅一期一会の冬の虹
着ぶくれて婆（ばば）の膝には猫二匹

郁子

○着ぶくれや数国英社荷の重き
冬虹や独り歩けば拾う神
飛びながら富士は冬虹指の先

えり

○着ぶくれてときめく事ももうなくて
○塵を出すおとなりさんも着ぶくれて
父さんと呼べば母さん着ぶくれて

夕子

○眼差のやさしき医師や冬牡丹
甲羅干しカメ三ひきや冬日和
感嘆の入院仲間冬夕焼

一枝

着ぶくれて立つ裸木にみつめられ
冬の虹タルト・タタンを焼いてみる
赤ベレー人形抱いて喫茶店

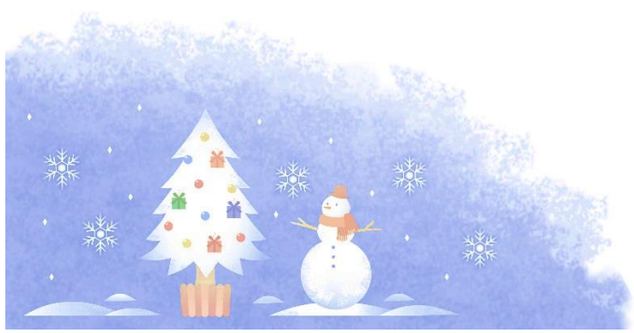
富子

○若き背に揺るるたすきや冬の虹
着ぶくれてそぞろ歩きの探鳥会
庭の木に綿こんもりとクリスマス

千代

○一陽来復木星土星大接近
八幡平眼下に架かる冬の虹
十二月女子（おなご）ポリスに叫きおり

文子

着膨れて知らぬ存ぜずにて済ます
立ち止まり冬虹を指す共白髪
突き刺さる一言ありぬ冬の虹

味元　昭次　作品